

小学校における足場かけ

—正統的周辺参加論を手がかりに—

教育デザインコース 教育学領域

菊池 夏世

1. 発表内容

本研究の目的は、子どもたち同士の「足場かけ」とはどのようなものか、それにより子どもはどのような姿を見せるのか、クラスの子どもたちの変容はどのようなものなのかということを明らかにすることである。そのために正統的周辺参加論を参照して、分析を試みた。

「足場かけ」とは、ウッド、ブルーナー&ロス(1976)によって提唱された、課題を達成するために行われる年長者や熟達者の支援のことである。これはヴィゴツキーの最近接発達領域（仲間と一緒に取り組むことで、一人ではできなかったことができるようになることもある、それが次に一人でできるようになることであるという発達の捉え方）を背景としている。ヴィゴツキーは仲間と共にと言っているのだが、足場かけの定義としては年長者や熟達者とされている。また一般的な教室では教師対子どもの関係性だけではなく、子どもと子どもの関係性も存在している。またハモンド（2009）の研究では意図的に準備された“マクロ・レベルの足場かけ”と偶発的に行われた“ミクロ・レベルの足場かけ”があるとしている。今回の調査では、“ミクロ・レベルの足場かけ”を対象とし、データを収集した。そのため、本研究では子ども同士ではどのような足場かけが行われているのかということを、レイヴ&ウェンガーの正統的周辺参加論（新参加者が十全的参加を目指すことで熟達者になるという考え）を手がかりに、エスノグラフィーの手法での分析を行った。

調査は2014年8月24日から2015年3月25日まで週に一度、一時間目から下校時刻まで、外国につながる児童が5割以上在籍している、横浜市立X小学校にて行った。そこで、周囲の子どもたちがベトナムにつながる男子児童が授業内でうまく発言できるように促している事例、ベトナムにつながる女

子児童が計算の方法を理解できるように、母語支援者、別の女子児童が互いに材料を集めたことによって足場ができたこと、事例を分析した。

以上のことから、ミクロ・レベルの足場かけは偶発的なものだけではなく、集団のやり取りによって、隠されていたためあてが掘り起こされた足場かけもあるという仮説を示した。正統的周辺参加論とは集団でのやり取りのなかで新参加者が熟達者に変成されることと捉え、そのようなやり取りの中で、ミクロ・レベルの足場かけは成立するのではないかという知見を発表した。

2. 実施報告

発表後に貴重なご意見をいただくことができた。例えば正統的周辺参加論とは、周辺の新参加者が中心の熟達者へ変成されていく過程を捉えたものであるが、本発表において、周辺から中心に向かう変容についての説明がなかったため、正統的周辺参加論と発表内容との関連が不明である、というご指摘をいただいた。本研究はエスノグラフィーを用いて、足場かけについて明らかにしようと試みた研究である。正統的周辺参加論にこだわることをせず、フィールドノートの記述から、小学校でどのような足場かけが示されるのか分析し、足場とならなかった記述に関する考察も加えたい。本発表で足場かけの事例として示したものが、子どもたちの能力を補填するだけで、理解を促すための足場の組み立てになっていなかったのではないかというご教示もあった。したがって、今後は、足場かけについての捉え方を見直し、ミクロの中のマクロという観点も取り入れ、本発表へのご意見を生かして研究を進めたい。